

そこを急いで逃げたが、国府軍の飛行機に射撃されたり、八路軍におどかさされ、夢中で郊外へ逃げ、途中で日本人三人と合流した。

四人で歩いて、下山付近にさしかかったとき、中間の二人が線路わきのトロッコを発見し、これを手動で動かした途端、付近の山腹からのいっせい射撃に合い、二人とも重軽傷を負った。これを目のあたりに見たもう一人（上海同文書院出身）がターチョウを借りてくれたので四人で大石橋までたどりつくが、途中で食事には困り、何度となく国府軍から呼び止められた。

そこからは列車が数本だったが、日本人は乗車を拒否され、仲間と鐵路警護隊に嘆願し、やっと機関車（石炭車の部分）に重軽傷者を乗せることができた。兩人とも奉天にぶじ到着したか、いまなお気にかかってならない。

その後、昭和二十一年七月十五日に病身の親とともに舞鶴港へ上陸し、日本における生活の第一歩が始まったのである。

敵中縦断二千里

北海道 小曾川 才松

戦雲亜細亜の空をおおった昭和十三年十月の上旬、とまきの流れに流されて青春時代の夢であった東京生活をなぐり捨てて国策にそうべく酷寒零下三十余度、枯木に宿る鳥もない満州に渡り私は開拓団の本部に勤務しました。

昼夜警備付で匪賊の出没を気にしながら異国の地に理想郷の建設に全員一致協力日夜努力を続けた結果、五年後には建築も全戸完了、続いて精米、製材、醸造、鍛工、酒造の各部建設他に学校、病院の新築も完了、各戸家族も大勢になりつつあった十九年には、戦局拡大不利になり同胞は次々に戦地に向かった。

私は昭和二十年五月十二日妻子と別れを告げ、当時の平安六八六歩兵部隊に入隊、まもなく国境に近い孫呉の北、石垣山の陣地構築に移動した。毎日が対戦車（人間

爆弾)の訓練であった。

八月九日突然ソ連の戦闘機数機で陣地は機銃掃射を浴び、孫兵の部隊は炎上した。十八日夜九時終戦を知らされた大隊長は拳銃自殺をした。すべての命令系統を失ない誰言うともなく現地召集者は脱出しようと幕舎の外は脱走兵の足音が闇の中に消えて行った。私もいつの間にか食糧等を雑のうに詰めこんで武装のまま脱走の群に入りこんだ。ここから詳細に記すとあまりにも長くなるので主なものを書きます。

山を下り平地に出た脱走者は帯状に続いた。空が白みかけたとき、敵の機銃掃射を繰返し繰返し浴びた。それから日中は草原や山に寝て夜、鉄道づたいに歩いた。鉄道はよき道しるべであるからです。二、三日歩いた夜、右手に黒いものが見えると思ったとたんにドーンという音とともに昼を欺く明るさとなり戦車から機銃掃射を受け、ばたばたと倒れる中湿地にとびこんで夢中で逃げた。そして草むらに寝た。朝、目をさまして見ると、となり五、六人いた。今日は雨降りだ。歩いた前方に一軒の家が見えた。何か食糧があるかも知れない。板壁を

こわし焚火をして芋をゆでたそのとき、ゴーという音とともにソ連兵だ。皆、武装解除され現役兵らしい二人が銃殺された他は解放され更に幾日かあとに開拓部落が見えた二十数軒の空家は銃殺された日本兵士で一杯であった。ここでも敵襲、焼打ちされた青年将校が自殺をかけた。皆、畔道を逃げそれから幾日かが過ぎた。我々の仲間と人数は毎日変わっていった。

前方に黒山の人、ノモール河だ。渡る者は中程で人馬もろとも流された。激流だ。私は上流に向かって山に登り翌日、川幅百メートル、四十五度流されることを計算、目標を目がけて渡り切った。一人になって更に歩く。倒れている日本兵は先の満人部落に数人で食べるものを求めた銃を取られ多数の満人に撃たれみな死んだ。

私は部落を避けて歩き開拓団について一泊、団長から汽車賃を頂いて満人の服を着て汽車でハルビン、吉林まで車中ソ連兵や満人に危ないこともあったが、吉林から八道、河子、更に撫順まで幾度か死線を越えそこには我が団の団長を初め団員(生き残り)と婦女子がいた。子は亡くしたが妻もいた。皆、生命財産の保証もなく、無

政府状態の中で食を求め身を守る毎日。街にはソ連、八路、中国の兵が氾濫している。死骸の山。難民は倒れるな祖国の土を踏むまでと励ましあった。

夢遊病者のように翌年七月帰国船に乗った。国破れて山河あり、山が見えた。感涙滂沱たり。

ホロンバイル死の脱出行

岩手県 折居次郎

満州でいちばん西北の国境地帯ホロンバイルにいたので、あの頃はソ連が敵だと誰しも思っていたし最初に戦火に巻きこまれる運命にあるんだと覚悟はしていた。しかし、ここが戦場になり、一時避難することがあっても、興安嶺の向こう側までであり、やがてはまたもどつてこられるものと、関東軍と日本を信じていた。

応召者があいつぎ、女と子どもだけの家では心細いかぎり、隣り近所が相寄り、いっつどんなことが起こるか分からないので、警察や憲兵隊と相談し、連絡していた。

開戦となると、すぐ戦場になるので、いつでも脱出できるように、どこの家でも、リュックに、最低オムツ、ネンネコと少しの着がえを揃えていた。

八月九日、ソ連軍が侵入してきたらしいとの情報、翌十日朝、団に情報を取りに行ったところ、早馬で団に行く警官と会い「駅に最初の避難列車が着いて待っている、すぐ乗るように」と連絡を受け、急いで引き返し、合図の鐘をならし、馬車をいそがせ、駅に着き、今まさに発車せんとする無蓋貨車にとびのった。座る余地のない満員の中にわりこんだ。

運良く免渡河を脱出できた。前々から準備していたはずなのに、着のみのままであった。興安嶺の長いトンネルの中は、煤煙と水滴で、子どもたちが苦しがり、おとなでも死ぬかと思うほど。やっとチチハルについた。

チチハルでは開拓会館にはいった。ハイラルを引揚げた人たちが一杯。ここで、二、三日炊出しの接待を受けたが、南下するというので、乗車した。着いたところは、ハルビンで、八月十六日だった。

ここにきて、本格的な避難生活がはじまった。すこし